「先輩♪私の赤ちゃんになって♪」
ムレムレおちんぽを甘やかすバブミ～おまんこフルコース♪

※一部本編と異なる場合があります

◆Track.1

●マンションの5階・通路（夜）

真衣　「もうちょっとですからね、先輩。私のうちで休みましょうね。えっ？　ひとり暮らしの女の子の部屋に入るなんてできない？」

真衣　「ダメです。私は先輩にお礼しなきゃいけないんですから。んー？　何のお礼かですって？　もー、さっきの飲み会で私を助けてくれたじゃないですか」

真衣　「チーフが強引に私に飲ませようとしたお酒、全部先輩が飲んでくれました。そのうえ上手くチーフをおだてて、私をセクハラから守ってくれました」

真衣　「前も、その前の飲み会も、です。私、ちゃんと覚えてるんですから。ふえ？　今日はヤケ酒しただけ？」

真衣　「まー、先輩がずっと準備してた企画書、ボツにされちゃいましたもんね……。残業して休日出勤もして、先輩ずっとがんばってたのに……」

真衣　「私は面白そうだなって思いましたよ。だから、どうしてボツになったのか全然理解できなくて……ああ、どうしましょう、先輩……私、だんだん腹が立ってきました……！」

真衣　「だいたい口だけの上司なんて要らないですよ！　チーフもディレクターもクソですクソ！　ホント意味わかんないですよ！　どっかに左遷されませんかね、あの人！」

真衣　「まぁ、それはそれとして……。先輩が私を助けてくれたことには変わりません。だから、私にお礼をさせてください。ん？　あ、どんなお礼なのか気になります？」

真衣　「それはですね～？　私が先輩をい～っぱい甘やかして、た～っぷり癒してあげるんです♪」

◆Track. 2

真衣　「さ、着きましたよ。ここが私のうちです。部屋番号、しっかり覚えて置いてくださいね」

真衣　「はい？　やっぱり帰る？　だーめーでーす！　も～、酔っ払っているのに抵抗しないでくださいよ～！　言う事聞いて下さい、先輩！」

真衣　「（耳元で囁くように）私に甘えたくないんですか？　癒されたくないんですか？　今ならエッチなことをしちゃってもお酒の勢いってことで言い訳できますよ？」

真衣　「（モノローグ）あ、先輩が迷ってる。ふふふっ。もうひと押し……」

真衣　「だいたい先輩ったら、フラフラしちゃってて足元危ういじゃないですか。このまま先輩だけを帰すなんてできません。少しだけ休んで行きましょ？ね？」

真衣　「（モノローグ）やったっ。先輩がうなずいた！」

真衣　「ふふふっ。じゃあ、中に入りましょうね～」

真衣　「片足を上げてください、先輩。私が靴を脱がしてあげます♪　遠慮はなしですよ？　ほらほら～足を上げてください♪」

真衣　「はい、上手に脱げました～。次は反対側ですよ～」

真衣　「よっと……こちらも上手に脱げました♪　酔って疲れてるのにがんばりましたね♪　えら～い、えら～い♪　はい、それじゃあベッドへ行きましょう」

真衣　「えっ？　ベッドはさすがに恥ずかしい？　でも、横になった方がいいですよ？　そのために冷たい水も買ったんですから。も～。ここまで来て恥ずかしがらないでください。はいはい、行きますよ～」

真衣　「やっぱり先輩の足元、ふらふらですね。もうちょっとですよ、先輩。がんばれがんばれ♪　ほら、がんばれがんばれ♪」

真衣　「はい、着きました～。そのままベッドに座ってください」

真衣　「今お水を用意しますね」

真衣　「さぁどうぞ♪　って、もしかしてペットボトル持てないくらい辛かったりしますか？　じゃあ私が飲ませてあげちゃいますね♪」

真衣　「ささ♪　支えててあげますからグイっといっちゃってください♪」

真衣　「わっ。一気に全部飲んじゃった！　でも、たくさんお水を飲むのは良いことですから、それでオッケーです」

真衣　「あっ、先輩がベッドに倒れちゃった。ああ、いいんです。あんなにがんばったんですから疲れが溜まってるんですよ。だから……」

真衣　「家に帰るのはやめて、このまま私の部屋でお休みしましょ？　ね？」

真衣　「ふふふ。やっと観念してくれましたね。じゃあ、まずは何をして欲しいですか？　あ、放っておいて欲しいってのは無しです。それ以外なら何でもしてあげますよ？」

真衣　「もちろん、エッチでいやらしいお願いでも♪」

真衣　「あははっ。先輩が真っ赤になってます。いいんですよ？　先輩の頼みならどんなエッチな事でもしてあげちゃいますから♪　遠慮なく言ってください♪」

真衣　「え？　膝枕？　エッチなお願いじゃなくていいんですか？」

真衣　「ふふふ。とりあえず膝枕、ですね。確かに甘えようと思った時、とりあえずビール的な感じがありますよねー。カップルでもイチャイチャする時はまず膝枕から始まるみたいな？」

真衣　「分かりました♪　では早速、んしょっと」

真衣　「少し頭を上げてください、先輩。そのまま私の太ももに乗せて……」

真衣　「……んっ……自分で少し頭を持ち上げてますよね？　完全に力抜いていいですよ？　はい、オッケーです」

真衣　「どうですか？　私の膝枕。気持ちいいですか？　柔らかくていい匂いがする？　ふふっ。それはよかったです」

真衣　「あ、ずっと同じ姿勢が苦しいようでしたら寝返りを打ってもいいですからね。どうぞ先輩の好きなようにしてくれて……あんっ。先輩の前髪が太ももに擦れてちょっとくすぐったいです。じゃあ、頭を撫でながらヨシヨシしてあげますね～」

真衣　「ヨシヨシ、ヨシヨシ……先輩は毎日がんばってますね。ヨシヨシ、ヨシヨシ♪　残業だって嫌な顔せずにやっててて偉いです」

真衣　「今回は企画がボツになっちゃいましたけど、先輩のアイデアはどれも絶対面白いですから。すぐに周りも認めるようになりますよ。ヨシヨシ、ヨシヨシ……」

真衣　「ん～、先輩？　もしかして今、涙目になってます？　隠さなくていいんですよ。泣きたいときは泣いた方がいいんです。私が側にいますから。ね？」

真衣　「あ、涙、拭いちゃった。も～。もっと甘えて欲しいのにぃ～」

真衣　「（小さな声で独り言のように）……まぁ、ちょっとずつ心を開いてもらえばいっか」

真衣　「ふふっ。何でもありません♪　先輩はこのまま私に頭を撫でられててください……ヨシヨシ……がんばり屋さんの先輩……本当にお疲れさまです。ヨシヨシ～」

真衣　「つらいこと考えちゃだめですよ？　頭の中真っ白にして、私にた～っぷり甘えて、疲れを取ってくださいね♪　ヨシヨシ、ヨシヨシ♪」

真衣　「先輩ってばネコみたいに目を細めて気持ちよさそうにしてかわいい♪」

真衣　「ヨシヨシ、ヨシヨシ♪　先輩とっても可愛いですぅ♪　ヨシヨシ、ヨシヨシ♪」

真衣　「んー、何ですか？　私の手が気持ちいい？　嬉しい～♪　じゃあ、このまま続けますねー……ヨシヨシ、ヨシヨシ♪」

真衣　「あ、ついでに耳のマッサージもしてあげますね。きっと気持ちいいと思いますよ～♪」

真衣　「まずは耳たぶから……もみもみ……もみもみ……軽く引っ張りますよー……んー……もっかいもみもも……もみもみ……」

真衣　「で、次は外側から内側へ向かって……もみもみ……もみもみ……意外と気持ちいいですよね？　私もエステでしてもらったりするんですよー……もみもみ……もみもみ……」

真衣　「わっ、先輩、おっきなあくび！　眠かったらこのまま寝ちゃってもいいですよ？　え？　寝るのがもったいない？」

真衣　「膝枕くらい、言ってくれたらいつでもしてあげますよ？　あ、そうだ♪　今度会社の休憩室でこっそり膝枕してあげましょうか？　皆に隠れて私のお膝を独占しちゃうんです♪」

真衣　「ふふっ。では早速次の出社日にしてあげますね♪」

真衣　「あぁんっ。先輩がもぞもぞって動いたから、ちょっとくすぐったくて……。あ、いいんですよ、いつでも寝返りをしてくれて。ずっと同じ姿勢だと疲れちゃいますもんねー」

真衣　「……あ、先輩の手が私の太ももに……んんっ……触りたいんですか？　寝返りをうつときにたまたま触れただけ？」

真衣　「うー、遠慮なんかしないで触ってくれていいんですよ？　私は先輩を癒してあげたいんですから。だから、先輩のしたいこと何でもしてください♪」

真衣　「あ、やぁんっ♪　やっぱり触るんですね……やっ、んんっ……先輩の触り方、エッチぃ♪」

真衣　「んん♪　あっ、いいですぅ。先輩に触ってもらえて嬉しい♪　もっといっぱい触ってください♪」

真衣　「あ……んっ……ふぅ……はっ、あっ、んんっ……どうですか、私の太もも♪　すべすべ？　柔らかい？　雪みたいに綺麗？　あははっ。そこまで褒められると照れちゃいますね」

真衣　「でも、ありがとうございます、先輩……んっ……私もお返しに、先輩の頭をいっぱいヨシヨシしてあげます♪」

真衣　「ヨシヨシ～なでなで～♪　ヨシヨシ～なでなで～♪　ほらほら、もっと私の膝の感触楽しんでください♪」

真衣　「それにキスだってしてくれていいんですよ？　私の太ももぺろぺろして味わってください♪」

真衣　「あ、んんっ♪　くすぐったい……ひゃわ！　凄いですぅ♪　すりすりちゅ～ちゅ～されて、んんっ♪　私の太もも先輩に食べられちゃってますぅ♪」

真衣　「あぁん♪　私の膝気に入ってくれたみたいで嬉しい♪　んっ、はうっ♪　え、えへへ、私も気持ちいいですよぉ……はぁ……んっ……あっ……んんっ……」

真衣　「あっ……はぅ……んんっ……ああぁ……んんっ……先輩がどんどん積極的に……ああぁ……嬉しい……んん……あぁ……はあぁ……んんっ……」

真衣　「こんなに強くちゅっちゅされちゃったら、太ももにキスマーク付いちゃって、私の太ももマーキングされちゃいますよぉ♪」

真衣　「ふふ♪　これじゃあもう生足で外出できなくなっちゃいますね。でも別にいいですよ？　タイツで隠せば大丈夫ですし、先輩をいつでも感じられて私も嬉しいですから♪」

真衣　「って、あっ！　ズボンがあんなに膨らんで……！
とっても大きくて苦しそう……せっかくですしそこもマッサージしちゃいますか？　どうします？」

真衣　「んー？　聞こえませんよ？　ちゃんと言ってください。……うん……うん。おっぱい？　おっぱいを吸いながら……シコシコして欲しいんですか？」

真衣　「ふふふっ。やっとそういうお願いを言ってくれましたね。じゃあ……」

真衣　「私のおっぱい吸いながら、おちんちんシコシコぴゅっぴゅ、してあげますね♪」

◆Track.3

真衣　「では早速おちんちんズボンから出してあげますね～♪」

真衣　「わっ、先輩のおちんちん、おっきぃ……ちょっと血管が浮いてますね……なんだか凶悪な感じで、優しい先輩とのギャップが凄いです」

真衣　「次は、私のおっぱいですよね。んしょっと……」

真衣　「ブラも外してっと……」

真衣　「えへへへ、ぷるんっておっぱい揺れちゃいました♪
って、先輩ってば私のおっぱい食い入るように見ちゃって……先輩は大きいおっぱいが好きなんですか？」

真衣　「そうですか～好きなんですね～♪　ふふっ、よかった♪　おっぱいが大きいと肩が凝ってばかりでいいことなかったんですけど、先輩に気に入ってもらえるなら大きくなって良かったです♪」

真衣　「さぁ先輩♪　私のおっぱい、好きにしていいですよー。めいっぱい甘えん坊さんになってください♪」

真衣　「そ～れ♪　ぷるぷるおっぱいお顔に乗せちゃいますね～♪」

真衣　「えへへ♪　おっぱい全部先輩の顔に乗っちゃいました♪　息できますか？　できる？　なら、オッケー……って、あんっ！　いきなりおっぱい舐めちゃうなんて！　んんっ……はっ、あぁぁ」

真衣　「も～、赤ちゃんみたい……んんっ……はぁ、でも、赤ちゃんはこぉんなにおっきなおちんちんを持ってませんよねー……」

真衣　「先っぽこんなにぷっくり膨らんで……ちょっと触るだけでぴくんって動いてますよぉ」

真衣　「こんな暴れん坊でいやらしいおちんちんは、シコシコしてお仕置きしちゃいます♪」

真衣　「ほーら、シコシコ、シコシコ……あは♪　とっても熱くてやけどしちゃいそう♪　シコシコ、シコシコ♪」

真衣　「どうですか？　私の手コキ、気持ちいいですか？
先輩がビクビクって反応してくれてるから、感じてくれてるのはわかるんですけど」

真衣　「やっぱりちゃんと聞きたいなって。んー？　気持ち、いいんですね……嬉しい♪　私もおっぱいをちゅちゅうって吸われて気持ちいいですよぉ♪」

真衣　「おちんちんもっと気持ちよくなってくださいね♪
って、わ！？　おちんちんって言ったらまた膨らんできて……もしかして、エッチな事を言われると興奮しちゃうんですか？」

真衣　「あぁん、もう先輩ったら♪　職場の後輩にエッチな事言われて興奮しちゃうなんて、とんでもない変態さんなんですね～♪」

真衣　「でも先輩が変態さんなら、そんな先輩の事が大好きな私も同じ変態になっちゃいますね♪　だから、変態な私はもっとエッチな事言っちゃいます♪」

真衣　「おちんちん……シコシコ……おちんぽ……シコシコぉ……あ、おちんぽって言う方が興奮します？
なら、おちんぽって言ってあげますね♪」

真衣　「おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ♪」

真衣　「あっ！　先輩、今度は舐めちゃうんですか、私の乳首い……ああぁ……んっ……んくっ……はぁ……口の中に吸い込んで、ぺろぺろってされちゃってぇ……んんっ……！」

真衣　「……それも、気持ちいいですぅ……だから、お礼に……またヨシヨシしてあげますねぇ……いい子いい子……ヨシヨシ……ヨシヨシ……ナデナデ……ナデナデ……はぁ……」

真衣　「……先輩って……電車通勤……ですよね？　毎日、電車通勤、大変ですよね。毎日がんばって通勤してる先輩は……偉いです……ヨシヨシ……」

真衣　「……真面目にお仕事してるのも偉いです……ヨシヨシ……はぁ……あぁ……ナデナデ、ナデナデ～、んっ、はぁ……いい子いい子……んんっ……」

真衣　「やぁんっ……乳首、気持ちいい……あああぁ……んっ……はぁ、あふっ……んんんっ……ひあっ、んっ……ヨシヨシ……ヨシヨシ……ああぁ……んっ、あふっ……ふあぁ……」

真衣　「先輩はエッチな赤ちゃんですよねぇ……エッチでいやらしくて、とっても可愛い私の赤ちゃん♪　んんっ……シコシコ……シコシコ……おちんぽ……シコシコぉ……」

真衣　「（小さな声で独り言を言うように）……普段からそれくらい甘えてくれたらいいのに」

真衣　「んっ……何でもありませんよ～……ふふっ。先輩はそのままおっぱいを吸っててください……ヨシヨシ……ヨシヨシ……ナデナデ……ナデナデ……」

真衣　「あ、おちんぽの先からぬるぬるしたのが出てきました。ガマン汁ってやつですよね？　んんっ……はぁ……いやらしい匂いもしてきましたぁ」

真衣　「ますます興奮しちゃいますぅ……あっ！　乳首、そんな強く吸っちゃ……んっ、あっ！　やぁ！　口の中でペロペロしちゃ、あんっ！？」

真衣　「ベロの動き速いいいっ……！　でも、先輩がしたいなら、もっと強く吸ってもいいですよぉ……んんっ……吸ったり舐めたりだけじゃなく、噛んでもいいですからねぇ……あっ！」

真衣　「また言った側から、すぐ噛んで……んんっ……ああぁ……！　先輩の噛み方、優しいぃ……あぁ……んっ……はっ、ああぁ……！」

真衣　「私だっておちんぽもっとシコシコしてあげるんですからぁ！　シコシコ……シコシコぉ……んんっ……おちんぽ、シコシコぉ……ああぁ……！」

真衣　「先輩の頭もナデナデ……ナデナデ……ヨシヨシ……ヨシヨシ……はぁ……ガマン汁がいっぱい出てきましたよぉ……ああぁ……んっ……シコシコ……シコシコぉ……」

真衣
「反対の乳首も舐めたいですか？　もちろんいいですよぉ……じゃあ、またちょっと頭をあげてください」

真衣
「んしょっと。どうぞ、頭を降ろしてください、先輩……あっ！　すぐ乳首、吸っちゃうなんてぇ……！　んんっ……舐め方も、吸い方も、噛み方もさっきより上手ぅ……！」

真衣
「おちんぽもちゃんとシコシコしてぴゅっぴゅさせてあげますからね……シコシコ……シコシコ……んんっ……あぁぁ……！」

真衣
「はぁ。一生懸命おっぱいを吸う先輩かわいい♪　んっ……エッチだけど、かわいいですぅ……あぁぁ……ヨシヨシ……ナデナデ……シコシコ……シコシコぉ……」

真衣
「あ、そうだ……おちんぽの先っぽもヨシヨシしてあげますね……ヨシヨシ……ヨシヨシ……しっかり勃起できて、偉いでちゅよー……ナデナデ……ナデナデ……」

真衣
「……ヨシヨシ……ヨシヨシ……ナデナデ……ナデナデ……ふふっ、先輩がびくびくって反応してます。そんなに気持ちいいんですか？」

真衣
「ガマン汁のせいで、ぐちょぐちょに濡れちゃって、ぬちゅぬちゅっていやらしい音がしてますね……はぁ……んんっ……はっ、あぁぁ……！」

真衣　「もっとシコシコしてあげますねぇ……シコシコシコシコ♪　シコシコシコシコ♪　あああぁ……んっ……おちんぽがビクビクって震えてますぅ……もしかしてイキそうですかぁ……？」

真衣　「いいですよぉ、いつでも出してくださいね……はぁ……んんっ……怖がらなくていいですよぉ♪　射精するまでヨシヨシしててあげますからぁ……ヨシヨシ……いい子、いい子……ヨシヨシ……」

真衣　「おっぱい、ちゅっちゅしながらドピュドピュって出しちゃいましょうねー……がんばれ、がんばれぇ♪　ふふふ♪」

真衣　「あ、ますますビクビクしてきましたぁ！　先輩、イッてくださいっ！　私のおっぱい吸ってヨシヨシされながら射精してくださいっ！」

真衣　「ちゃんと見ててあげますから♪　んっ、あああぁっ……！　私もいいっ！　乳首、すっごく感じちゃううっ！」

真衣　「あ、亀頭が膨らみましたっ……！　出して！　どぴゅどぴゅって、いっぱい射精しちゃってくださいいいぃっ……！」

真衣　「あああぁっ……！　出てる！　精子、たくさん出てますっ！　凄い勢いですよぉ！　ああっ！　もっと出して！」

真衣　「んっ！　また出ましたぁ！　んんっ！　熱い精子の塊が飛び出るの、止まりません！　もっと、もっと出してくださいっ！　あああぁぁ……！」

真衣　「本当にたくさん出しましたねぇ。ヨシヨシ……いい子いい子……すっきりしましたか？　そうですか。私も気持ちよかったですよ……ふふっ……」

真衣　「これが先輩の精子……エッチな匂いがしますね……どろどろで……ねちょねちょで……じゅりゅっ……んっ……不思議な味ですっ……」

真衣　「それじゃあ、汚れちゃいましたからお風呂に入りましょうか？　もちろん、私が洗ってあげますね♪」

◆Track. 4

●真衣の部屋・浴室（夜）

真衣　「今、泡立ててますからもう少し待ってくださいねー。それで今のうちに先輩に質問です。どういう風に洗って欲しいですか？」

真衣　「んー？　背中を？　私のおっぱいで？　はい、わかりました♪　ふふふっ。何でもしてあげるって言ったじゃないですかー。もちろんオッケーですよ」

真衣　「では、たっぷり泡立てたボディーソープを私の胸に……っと。先輩の背中へ移動しますね。この大きな背中へ私のおっぱいを」

真衣　「ぴとっ。ああ、とっても熱いですね……どうですか？　気持ちいいですか？　って聞かなくても、先輩の喘ぎ声でわかります……気持ちいいみたいですね」

真衣　「ふえ？　他にもまだリクエストがあるんですか？　いいですよ。遠慮しないで何でも言ってください♪」

真衣　「乳首？　乳首をいじって欲しいんですね。わかりました。では……指先にボディーソープをたっぷりつけて、乳首を弾くように……コリコリ……コリコリ……」

真衣　「あんっ♪　先輩がピクピク震えながら喘いでます……気持ちいいんですねー……かわいー……コリコリ……コリコリ……ふふっ。こんなに反応するなんて……」

真衣　「先輩の乳首はとっても敏感なんですねー……私と同じです。私も一人でオナニーする時にいっぱい乳首虐めちゃうんですよ？　ふふ♪　お揃いですね♪　なんだか嬉しい♪　このまま続けますねー……それでたまーにキュッって摘まむんです……」

真衣　「あっ、ボディーソープで指が滑って上手く摘まめませんでした。もう一回……キュッ……キュッ……今度は上手にできました。続けますね……」

真衣
「おっぱいで背中を洗いながら……キュッ……キュッ……ふふっ。先輩の喘ぎ声、本当にかわいー……感じてくれて嬉しいです……」

真衣
「先輩。少しだけこっちを向いてくれますか？　そしたらイイコトができるんです。あ、そうです。顔だけこっちに向ける感じで……これなら先輩の耳を……」

真衣
「んちゅっ……れろっ、んぷっ……ふふっ……ビックリしましたか？　でも、おっぱいで背中を洗ってもらって、両方の乳首をコリコリされて耳を舐め舐めされるのって気持ちよくないですか？　癒されませんか？　あ、今コクって頷きましたね……よかった……」

真衣
「じゃあ、このままキレイキレイしましょうね……んちゅっ、れろっ……ちゅっ……れろっ、ちゅっ……ちゅっ、れろれろっ……んんっ……ちゅぷっ……ちゅっ……」

真衣
「はぁ……先輩の耳、美味しい♪　いくらでも舐められますよ……んちゅっ、れろっ……ちゅ……ちゅぷっ……ちゅっ……ちゅぷぷっ……ちゅくっ……」

真衣
「ふぅ～～～……ふふっ。先輩、変な声が出ましたね……れろっ、ちゅっ……んちゅっ、ちゅっ……」

真衣
「ふぅ～～～……はぁ……先輩、かわいい……感じてるところ、もっともっと見たいです♪　だ・か・ら♪　反対のお耳も気持ちよくしてあげますね♪」

真衣
「こっちのお耳もキレイキレイしましょうね～　れろっ、ちゅっ……んちゅっ、ちゅっ……んあむっ……ふっ、ちゅくっ、れろ、ちゅる……」

真衣
「もちろん乳首も……コリコリ……コリコリ……キュッ……キュッ……ちゅっ、ふんむ……んえ、ふっ……はぷ、ん、ちゅっ……じゅりゅっ……」

真衣
「実はこれ、私も気持ちいいんです♪　だって、先輩の背中に乳首が擦れて……んっ……はぁ……あぁぁ……甘い刺激が……伝わってきて……」

真衣
「私のおまんこ……濡れちゃいますぅ……はぁぁ……本当ですよ？　せっかくシャワーを浴びたのにまたおまんこ汚れちゃってるんですからぁ……ちゅっちゅっ、れろれろっ、ちゅぷっ……」

真衣
「コリコリ……キュッ……コリコリ……キュッ……んん……ちろっ、れろっ……ちゅく、ん、ちゅぷっ……れろ、ぺろぉ……れろ、んちゅろ、れろぉ……」

真衣
「ああ、先輩のおちんぽ……触ってないのにピクピクって動いていますね……ここからよく見えますよ……れろっ、んちゅっ、れろっ……」

真衣　「おちんぽ、フル勃起しちゃってますね……嬉しいです……ちゅぷっくちゅ、くちゅ……れろれろ……んはっ……れろれろ……ちゅぷっ……」

真衣　「おちんぽさん、もうちょっと待ってくださいね。後でたっぷり洗ってあげますからね……ちゅぷっ、ちゅぱっ……んちゅっ、ちゅっ、れろっ……」

真衣　「んちゅっ……じゅぶっ、れろっ、ちゅぱ、ぷちゅ、んっ……コリコリ……コリコリ……キュッ……キュッ……んくっ、ちゅぷっ……ちゅぷっ、ちゅぱっ……」

真衣　「ぷはぁ……先輩……こっちのお耳も綺麗になってきましたよ……ちゅぷっ、くちゅ……んんっ……れろれろ……くちゅ……んふっ……ちゅむっ……」

真衣　「コリコリ……キュッ……コリコリ……キュッ……くちゅ……れろれろ……ちゅぷっくちゅ……ちゅぷっ……くちゅ……れろれろ……くちゅ……んふっ……」

真衣　「はぁ……ふぅ……じゃあ、そろそろおちんぽをキレイキレイしましょうね……んしょっと……」

真衣　「どういう風に洗いましょうか？　して欲しいことを言ってください、先輩♪　恥ずかしがっちゃダメですよ？　んー？　おっぱい？　おっぱいで挟んで洗って欲しい？」

真衣　「やったっ。そーゆーお願いを素直に言ってくれて、すっごく嬉しいです♪　さっきから先輩、私のおっぱいじっと見てますもんね。ああ、いいんです。好きなだけ見てください♪」

真衣　「では、おっぱいで洗っちゃいますね。先輩のおちんぽ♪　まずは浴槽のフチに座ってもらえますか？」

真衣　「あ、そうです。そんな感じで脚を開いて……私はボディーソープをおっぱいにたっぷりつけ直して……」

真衣　「おちんぽ、おっぱいでゴシゴシしましょうねー……んっ……あんっ！　おちんぽが跳ねて上手く挟めません～。先輩ったら、体は疲れてるのにおちんぽは元気なんですね。素敵です。ふふっ……」

真衣　「もう一回……ちゃんと挟んで……このまま……」

真衣　「はぁ……あぁぁ……パイズリですよぉ、先輩……んんっ……気持ち、いいですかぁ？　んっ、先輩の顔を見てたらわかりますけど……やっぱり言葉でちゃんと言って欲しいです……」

真衣　「気持ちいい？　よかったぁ……他にもして欲しいことがあったら、何でも言ってください……何でもしてあげますからぁ……そうやって今夜はいっぱい甘えてくださいね……んっ、はぁ……あぁぁ……」

真衣
「擦るたびに……おっぱいの間で、おちんぽがピクピク動いてますよぉ……とってもかわいい……愛しくなっちゃいます……んふぅん……はぁぁ……んんっ……んふ……んん……やっ……」

真衣
「先っぽから透明なお汁が出てきましたね……ガマン汁ですよぉ……んっ……あっ……ボディーソープと混ざって、ぬちょぬちょっていやらしい音がなってます……はぁ……んっ……」

真衣
「これ……やっぱり私も感じちゃいます……んんっ……パイズリってしてる方も気持ちいいんですね……あっ、いい……んっ……はっ……あぁぁ……んん……はっ、あっ……ん……あぁ……」

真衣
「はっ……あっ……んっ……はぁ……んっ……んっ、んふぅ……あぁ……んっ……あっ……はっ……あぁ……んっ……はぁんっ……んっ……はっ、あっ……んっ……はぁ……」

真衣
「んー、何ですか先輩？　私のおっぱいがあったかくて気持ちいい？　ちゃんと言ってくれるんですね……嬉しいです……はぁ……んんっ……あぁぁ……んっ……」

真衣
「私も、先輩の感じてる顔を見てると嬉しくて……もっと興奮しちゃいます……はぁ……あぁぁ……だから、自然とパイズリも速くなって……」

真衣
「こんな感じで……んんっ……はっ、ああ……私も気持ちいいっ！　んはっ……あっ……んっ……はぁ……あぁぁ……んっ……あぁ……はっ……んんっ！」

真衣
「先輩の喘ぎ声も……大きくなりましたぁ……んんっ！　あんっ……んっ……はぁんっ……んんっ……あぁっ……あふっ、んくっ……はっ、あっ！」

真衣
「先輩ってば、会社でも、私のおっぱいよく見てますよね？　いいんです……私、先輩に見て欲しくてわざと谷間を見せたりしてるんですからぁ……」

真衣
「気づいてませんでした？　先輩に、がんばってアピールしてたんですからぁ……だから、見てくれる方が嬉しいんです……んんっ！」

真衣
「これからも私のおっぱい……見てくださいね？　会社でもプライベートでもぉ……あぁぁ！　あっ、んっ……はぁんっ、んふぅ……んんっ、んふっ……はあぁぁ……！」

真衣
「見ていいのは先輩だけなんですからぁ……あぁ……先輩……せんぱぁい……私を見てくださぁい……んんっ……！」

真衣
「そのままもうちょっと屈んで……そしたらキスできそう……！」

真衣
「あっ……んちゅっ、れろっ……！　はぁ……キスできましたぁ……！　パイズリしながらもキス、ですよぉ……！」

真衣
「そういえば、こんなにエッチなことしてるのに……キス、してなかったですね……んんっ……なら、もっとしましょう？」

真衣
「ちゅっ……れろれろ……んんっ……れろれろ……ちゅむっ……くちゅ……んん……ちゅぷっくちゅ……！　ちゅっ……れろっ、ちゅっ……んんっ……！」

真衣
「はぁ……先輩とのキス……うっとりしちゃいます……もっと、もっとしましょう……んっ……ちゅぷっ……くちゅ……れろれろ……ちゅぷっくちゅ……！」

真衣
「んん……くちゅちゅむっ……んんつ……くちゅ……んふっ……れろれろ……！　くちゅちゅぷっ……んふっ……ちゅぷっ……れろれろ……ちゅぷっ、ちゅううっ……！」

真衣
「ああ……私、とっても興奮してます♪　れろれろ……ちゅぷっ……れろれろ……！　ちゅむっ……くちゅ……ちゅぷっくちゅ……ちゅくっ……！」

真衣
「あんっ！　先輩の腰が跳ねて……おちんぽも、すっごいピクピク動くようになりましたね♪　亀頭もぷっくり膨らんで、ガマン汁がどんどん出てきます……！」

真衣
「もしかして、もうイッちゃいそうですか？　んっ……いつでも出していいですよぉ……あっ、んっ、はぁ……んんっ、んはっ、あぁ……！　あ、んっ、んふぅんっ……！」

真衣
「あっ！　今、ぴゅってちょっとだけ精子が出ました♪　出してください♪　このまま先輩の大好きなおっぱいにたっぷり射精してくださいっ！」

真衣
「ひゃっ、ああっ……！　すっごい出てますっ……！　私の顔に、いっぱいかかって……ああぁっ……！　顔に射精されるの、気持ち、いいっ……！」

真衣
「すごっ……！　んんっ……！　精子、あっつぅいっ……！　ねばねばしてて……いやらしい匂いですっ、んんっ……！」

真衣
「あんっ！　まだ出てるううっ……！　あぁ、んっ、はぁん……んっ……！　んんんっ……！　ああぁぁ……！」

真衣
「はぁ……はぁ……いっぱい出しましたねぇ……んんっ……ああぁ……私のおっぱいに……先輩の精子がべったりついてますよ……はぁ……」

真衣　「凄い量……エッチな匂い……好き……はあぁぁ……うっとりしちゃいますねぇ……あっ、なんだか私が楽しんでばかりになっちゃいました……」

真衣　「先輩はどうでしたか？　んっ……癒された？　それはよかったです♪」

真衣　「それじゃあおちんぽお湯で流しますよー。ん？　イッたばかりだからシャワーの刺激だけで感じちゃう？　そんなに敏感なんですね、射精直後のおちんぽって……」

真衣　「すみません。ちょっとだけガマンしてください ねー。綺麗にしますから。すぐ終わりますよー。こっちと、あと裏筋とタマタマのところも……」

真衣　「んっ。これで綺麗になりました♪　あー、でも、おちんぽはおっきしたままですねー。それなら、この続きはベッドでしましょうか♪」

◆Track.05

真衣　「先輩はベッドで仰向けに寝ててくださいね。ぜ～んぶ私がしてあげますからね♪　まずは、ちょっとおろそかになっている――」

真衣　「……キスからしましょうね、先輩♪」

真衣
「んっ……ちゅぷっ……くちゅ……ちゅぷっ……れろれろ……んふぅん……ちゅむっ……はぁ、先輩の舌、美味しい……んちゅっ……ちゅぷっ、れろっ……」

真衣
「先輩は、どう……ですかぁ？　んちゅっ……ちゅっ……くちゅちゅぷっ……ああ、キスばっかりしてたら先輩が喋れませんね……ぷあっ……」

真衣
「私とのキス……気持ちいいですか？　凄く興奮する？　ふふっ♪　嬉しい……じゃあ、もっとしましょうね……れろれろ……はあぁぁん……んんっ……くちゅちゅぷっ……」

真衣
「ちゅぷっくちゅ……んん……んふっ……ちゅむっ……くちゅ……れろれろ……ちゅぷっ……はぁ、先輩……せんぱぁい……んっ……れろっ、ちゅっ……ちゅぷっ……」

真衣
「ずっとキスしてられるくらい……先輩とキスするの……大好きになっちゃいました♪　ちゅぷっ、れろっ、ちゅっ……ちゅぷっ……んっ……ちゅ、れろっ……」

真衣
「でも、他の場所にもしてあげたいです……先輩はどこにキスして欲しいですか？　耳？　ふふっ……さっきの耳なめがお気に入りみたいですね……じゃあ……」

真衣
「こっちの耳から舐めちゃいますね……はぷっ……くちゅ……れろれろ……はぁ……美味しい……ちゅぷっくちゅ……んんふ……ちゅむっ……」

真衣
「耳の穴のトコロもちゃんと舐めてあげますね……くちゅちゅぷっ……んふ……れろれろ……ちゅぷっ……れろれろ……ちゅぷっ……」

真衣
「んー？　全然汚くないですよぉ……お風呂でちゃ～んとキレイキレイしましたしね……んふぅん……ちゅむっ……くちゅ……れろれろ……ちゅぷっくちゅ……」

真衣
「あ、そうだ。私の手が空いてるから……先輩は耳を舐められながら、どこを触って欲しいですか……？　やっぱり乳首ですか？」

真衣
「ふぇ？　指をしゃぶりたい？　……ふふっ♪　赤ちゃんのおしゃぶりみたいですね♪　いいですよぉ……じゃあ、私の指を咥えて、ちゅっちゅしてください……」

真衣
「あっ……んんっ……指、気持ちいー……先輩の舐め方、エッチじゃないですかぁ？　好きに舐めてるだけ？　とっても上手ですよぉ……」

真衣
「私も負けませんからぁ……先輩の耳を……んちゅちゅぷっ……れろれろ……ちゅむっ……くちゅ……んっ……ちゅぷっ……れろっ、ちゅ……」

真衣　「んちゅっ……じゃあ反対側も舐めちゃうので、いったん先輩のお口から指を抜きますね」

真衣　「こっちもねっとり舐めてあげますね……くちゅちゅぷっ……くちゅっ、ちゅぷっ、んっ、くちゅ……れろれろっ、れろれろっ……ちゅむっ……れろっ……」

真衣　「あ、指を舐めるんですよね？　はい、どうぞー……んっ……んふっ……くすぐったぁい……でも、気持ちいー……はぁ……れろっ、ちゅっ……れろれろっ……」

真衣　「あんっ♪　こっちのお耳も美味しい……ちゅくんっ、くちゅ……ちゅぷっくちゅ……ずっと舐めていられます……れろれろ……ちゅぷっ……んっ、くちゅ……」

真衣　「先輩は指、好きなだけしゃぶっててていいですからねー……ちゅぷっくちゅちゅむっ……っ、れろれろっ、ちゅぷっくちゅんっ、ちゅぷっ……んー……」

真衣　「耳たぶ、吸ってあげますね……ちゅうううううぅぅぅ……！　ふふっ、ビクビクって先輩が反応しました……好きなんですね……ちゅうううううぅぅ……！」

真衣　「舐めながら……吸ってあげますね……ちゅぷっ……くちゅ……ちゅく……れろれろ……ちゅぷっ……ちゅうううううぅぅ……！！　れろっ、ちゅっ……」

真衣　「……ちゅぷっ……ちゅうううううぅぅ！！　んっー……耳たぶも美味しい……はむっ、はむっ……噛んじゃいました……えへへ……はぁ……んっ……」

真衣　「くちゅ……ちゅむっ……はあああぁ……ちゅくちゅぷっん……ちゅぷっ……れろれろ……ちゅっ……ちゅうううううぅぅ……！！　ちゅぱっ！」

真衣　「……先輩……目を閉じて？　そのまま……ちゅっ……まぶたにもキスしてあげます……ちゅっ、ちゅぷっ……こっちのまぶたにも……ちゅっ……ちゅぷっ……」

真衣　「……もう目を開けていいですよ……じゃあ、次はどこにキスするのがいいですか？　あ、他のことでもいいですよ？　何でも言ってください……」

真衣　「首と乳首？　ふふっ。わかりました♪」

真衣　「ああ、先輩の首だぁ♪　お仕事中にいつもワイシャツの隙間から見えてて、男らしくて格好いいなって思ってたんです……んー……ちゅっ、ちゅぷっ……ちゅっ……」

真衣
「キスマーク、つけちゃっていいですよね？　ダメって言ってもつけちゃいますから♪　先輩は私のものなんだって、体の隅々に刻み付けてあげます♪」

真衣
「それ、いきますよ～♪　ちゅっ、ちゅうううう
うぅぅ……！！　うーん、このくらいじゃキスマークつかないですね……」

真衣
「もっと強く唇を押し付けて……ちゅうううううう
うぅぅぅぅぅぅぅ……ちゅぱっ！！！
はぁ、はぁ……！　ふふっ。赤いの、つきました……嬉しい……」

真衣
「こっち側にも……ちゅうううううううぅぅ
ぅぅぅぅぅ……ちゅぱっ！！　んっ……ちゅ、れろれろっ……んちゅっ、ちゅぱ……んちゅ……れろっ……」

真衣
「れろれろ……ちゅぷっく……はあぁ……んっ……あぁ……ちゅむっ……くちゅ……ちゅうううう
うぅぅ……ちゅぱっ！！　んちゅっ……れろっ、ちゅっ……」

真衣
「ちゅうううううぅぅ……ちゅぱっ！！　んんっ……キスマーク、三つもつけちゃいましたよ……はぁ……れろっ、ちゅっ……ちゅぷっ……れろっ……もし消えちゃったらまたすぐにキスしてあげますからいつでも言ってくださいね？」

真衣　「ふふっ♪　恥ずかしがっちゃって、可愛いです、先輩♪　じゃあ、次は乳首を舐めてあげますね♪」

真衣　「先輩の乳首……まだ触ってないのにすっかり勃起しちゃってますね……なら、焦らした方がいいのかな？　こうやって乳輪をなぞるように舐めて……れろっ……れろっ……ちゅっ……」

真衣　「反対側も乳首は指で……やっぱり乳輪をなぞるように……乳首には触れないように……れろ……れろっ……ちゅぷ……んんっ……れろ……んっ……一周しましたよ……」

真衣　「もう一周……れろ……れろ……と見せかけて、ちゅうううううぅぅぅ！　ぐちゅ、ぴちゅ……！　れろれろ……！　はあぁぁん……！　んんっ……！　くちゅぴちゅ……！」

真衣　「ふふっ、不意打ちで乳首を吸っちゃいました。びっくりしました？　先輩の身体がびくんって跳ねましたね。んちゅっ……れろっ……ちゅっ……！」

真衣　「反対側も舐めますよー……さっきより強めに舐めますね……ぴちゅくちゅ……！　んん……！　んふっ……！　じゅぶぶっ……！　ぴちゅくちゅ……！　れろれろ……！　ぴちゅ……！」

真衣　「はぁ……美味しい……びちょ、ぴちゅ……！　んふ……！　れろれろ……！　ぐちょ、じゅぶっ……！　ぴちゅ……！　れろれろ……！　ぴちゅ……！」

真衣
「ちゅうううううううううううう……ちゅぱっ！　はぁ、はぁ……！　じゅぶ、くちゅ……！　れろれろ……！　ぴちゅくちゅ……！　んんふ……！　ぴちゅ……！　ちゅぴちゅ……！」

真衣
「私……夢中で舐めちゃってます……先輩の感じてる声がかわいいから……ぴちゅくちゅ……！　ちゅっ、ちゅぷっ、ちゅっ……！　れろれろ……！　ぴちゅくちゅ……！」

真衣
「これじゃあ……乳首がふやけちゃいますね……もっと舐めたいですけど、このくらいにしておいて……次はどこにキスして欲しいですか、先輩？　んー？　おちんぽ？」

真衣
「おちんぽにキスして欲しいんですね……ふふっ……先輩も大胆になってきてくれて嬉しいです♪　わかりました、今私のお口で気持ちよくしてあげますね♪」

真衣
「わっ、あんなに出したのにがっちがちに勃起してますね、先輩のおちんぽ、かっこいいです♪　うっとりしちゃいますね……んー……匂いも……すんっ、すんっ……ふぁぁ♪　とっても濃くって、エッチな匂いがしますぅ♪」

真衣
「それじゃあまずは亀頭に……ちゅ……ちゅぷっ……あぁんっ……ちゅ……ちゅぷっ、れるっ……ちゅぱっ」

真衣　「裏筋にも……ちゅっ……れろれろっ……ちゅっ……ちゅ……ちゅぱ……ちゅ……ちゅぱ……ちゅう……タマタマにもキスしましょうねー……くちゅちゅ……くちゅ……ちゅっ……ぷちゅ……」

真衣　「……はぁ。先輩、何ですか？　キスだけじゃなくて、咥えて欲しい？　ですよねー。もちろんオッケーですよー……ふふふっ……では……はむっ」

真衣　「んちゅ……れろっ、ちゅ……んんっ……んふっ……ちゅぱ……！　んー……どうれす、せんふぁい？　わたひ、上手くれきてますか？　……れろっ、ちゅぱっ、ちゅ……んちゅ……ひもちいい？　ふふっ♪　うれひいです♪」

真衣　「んんっ……もうガマン汁が出てひましたよぉ……れろっ、ちゅぱっ、ちゅ……ねちゅ、れちょ……むちゅ、ちゅぷ……ちゅぱ……」

真衣　「んぷっ……！　んんっ……おくひのなはらでピクピク動いてまふ……んんっ……んー……はげひくひまふね……じゅぶぶぶぶっ……！　んちゅ……！　んふっ、れろ、ちゅぱっ……！」

真衣　「れろれろっ……！　ちゅぱっ。先輩の喘ぎ声がおっきくなりましたね。もっと……感じてください……はむっ。んちゅ、れろっ、ちゅぱっ、んちゅ……れろ……！」

真衣「んちゅ……ちゅぷっ、じゅぶぶっ……！　おひいい……おちんほ、おいひいれふぅ……！　ちゅぷっ、ちゅぱ、んちゅっ……！　ちゅっちゅ……ちゅぱっ、んちゅ、じゅぶ……！」

真衣「ちゅぷっ、ちゅくんっ……ちゅぱ、んちゅっ……ちゅるっ……！　ちゅくっ……んんっ……！　んー、なんれふか、ふぇんぱい？　いひほう？　んふふっ……らいていいれふよ？　後輩のおくひまんこできもちよふなっれくらさいね♪」

真衣「じゅぶ、じゅりゅ……ちゅぶぶっ、ちゅぱ、ちゅぶ、ちゅくっ……！　ちゅぷぷっ……ちゅぱ、んちゅ……！　ぴちゅ、くちゅ……んん……んふっ……くちゅぴちゅ……！」

真衣「んぶぶっ……！　おひんひん、ふくらみまひた……！　れそうなんれふね……！　このまま……ひゃへい、ひて、くらはいっ……！　じゅぶっ、じゅぶぶぶぶっ……！」

真衣「んぶぶぶぶぶうぅぅぅ～～～～～～～～～～！！！　んっ！　んんんっ！　んぐっ、んんんっ……！」

真衣「んぶっ！　んぶぶぶぶっ……！！　じゅぶぶぶぶぶぶっ……！　じゅぶっ、んぶっ……！　んー――っ！！」

真衣　「んっ――――……ごくっ！　ぷあっ！　はぁ、はぁ、はぁー……！　いっぱい出しましたね……んっー……不思議な味……でも好き……先輩の精子ですから……はぁ……」

真衣　「今日はたくさん出しましたしね。もう寝ちゃいます？　……あ、でも、おちんぽはおっきいままですね。どうします、先輩？」

真衣　「私のおまんこに入れたい？　ふふっ。わかりました。先輩はそのまま寝ててくださいね。私が上でいっぱい動いてあげますから♪」

真衣　「んしょっと……じゃあ、入れますね……んっ、あっ……！　んんんんんっ……！　おちんぽっ、おっきぃぃ……！　あぁぁぁ……！」

真衣　「全部……入りましたよぉ……！　おちんぽとおまんこが隙間なく密着してますぅぅっ……！　んんっ……！　これ、私の方が先にイッちゃうかもぉ……」

真衣　「とにかく、動きますね……！　はぁぁ……はっ、あっ……！　んふっ……んふぅ……うぅ……んっ……！　あっ……ひあっ、んくっ……！　あぁぁっ……！」

真衣　「これ、凄いっ……！　先輩のおちんぽ、凄いいっ！　私の子宮に何回もキスしてますうっ！　あああぁぁ……あふぅ……んんっ……はぁぁ……あぁ……あうぅ！」

真衣
「どうですか、先輩！　私、ちゃんとできてますか？　気持ちいい？　んんっ……！　気持ちいいんですね！　よかったですぅ！」

真衣
「私のおまんこ気に入ってくれるか不安だったんですけど……んっ、やっ、あんっ♪　……えへへ♪　またお腹の中で大きく……おまんこ気に入ってくれたみたいで嬉しいです、先輩♪」

真衣
「もっと、も～っと感じて欲しいから、おまんこパンパンしながら乳首もコリコリしてあげますね♪」

真衣
「両方の乳首を、人差し指で、コリコリって刺激しちゃいます♪　それ♪　コリコリ、コリコリぃ！　やぁん♪　乳首弄りと同時におちんぽ震えてますぅ……！」

真衣
「先輩のおちんぽ、凄すぎですよぉ……！　子宮の一番奥……赤ちゃんのお部屋におちんぽの先が、何回もキスしちゃってます……！　ああぁっ……！」

真衣
「せっかくですから、私達も、またキスしますかぁ……？　します？　ふふっ。蕩けたお顔でこくこく頷いちゃって♪　可愛い♪　んっ、ちゅっ、ちゅぷぅうっ……！」

真衣
「んんっ、ちゅぷ、んあっ……！　んんっ、あんっ、れろれろっ……！　ちゅぱ、んあっ、んんんっ……！　ちゅぷっ、れろっ、ちゅっ、んんっ……！　れろっ、ちゅぷっ……！」

真衣
「はぁっ！　先輩のベロ、美味しい♪　私、もう頭の中がトロトロで、私が癒されちゃってますよぉ…！　ちゅぷちゅぱ、んあっ……！　れろっ、ちゅっ、ああっ……！」

真衣
「あぁんっ、ちゅぷっ、れろっ……！　ちゅば、ああ、ちゅぷ、れろっ、んあっ……！　ぷあっ！　お口とおまんこでキスしながら、乳首もちゃんとコリコリしますからねぇ……！」

真衣
「ああっ、ちゅぷちゅぶ……！　んんっ、れろっ、ちゅ……！　はあぁんっ……！　先輩、ベロを出してください……！　そう、そんな感じです……！」

真衣
「吸ってあげますね……！　ちゅうううううううううう～～～～～！！　ちゅぱっ！　はぶっ！　れろれろっ、ちゅうううううっ～～！！」

真衣
「ぷあっ！　ふふっ、気持ちよさそうですね♪　なら、もう一回……ちゅうううううううううううう～～～～～！！」

真衣
「ちゅぱっ！　ふふっ、先輩のお口の周りにも、私のツバがいっぱいついちゃいましたぁ……！　なんだか私が先輩を犯してるみたいになっちゃいましたね……！」

真衣
「あ、何ですか、先輩？　おっぱい、吸いたい？　じゃあ、私が先輩の顔を抱きしめますから、好きなだけ吸ってくださいっ……！」

真衣
「ぎゅううっ……！　あっ！　先輩の顔がおっぱいの谷間に挟まっちゃいました……！　息苦しくないですか……！？　息苦しい？　でも、それがいい？」

真衣
「ふふっ……！　本当におっぱい好きなんですねぇ……！　おっきな赤ちゃんみたい♪　ヨシヨシ、ヨシヨシ♪　あっ！　乳首、吸っちゃうんですね……」

真衣
「好きなだけ吸ってくれていいですよ♪　あああっ……！　先輩が乳首を吸いながら、私のこと、ぎゅって抱きしめてぇ♪　これ、好きぃ♪」

真衣
「先輩と身体がぴったりくっついてて、嬉しいっ！　あああっ……！　乳首、ちゅうちゅう吸われて、私も気持ちいいですっ、んんんっ……！」

真衣
「先輩ももっともっと、いっぱい、気持ちよくなってくださいっ……！　あああ……んっ……！　はぁあぁ……あぁ……んふぅうぅ……！　んんっ……はあぁ……！」

真衣
「ひゃっ、ああっ！　先輩は、動かなくていいんですよぉ……！　いきなりそんなに動いちゃ、私が、イッちゃうじゃないですかぁ……！」

真衣
「だって、本当はさっきからずっとイキそうなのを我慢しながら、腰を動かしてるんですからぁ……！　ひああっ！　もっと激しく動いちゃうんですか！？」

真衣　「だめっ！　先輩！　私が、先輩を癒してあげたいのにいっ！　えっ、何ですか！？　私をイカせたい？　お礼に？　そんなの別にいいのに……！」

真衣　「でも、嬉しいですっ、先輩……！　先輩がそうしたいのなら、お願いしますっ……！　私をイカせてくださいっ……！」

真衣　「んあ！　あ、あ、んあっ！　やっ！　んんっ！　ん、ううぅ……はうっ！　あっ！　あぁ！　やぁっ！」

真衣　「あっ！　やっ！　本当に私、イッちゃいそうですっ……！　先輩もですか！？　なら、このまま中にっ、出してっ、くださいっ……！」

真衣　「先輩の精子、おまんこに欲しいですっ！　私の子宮に、残りの精子、全部、注ぎ込んでくださいいっ……！」

真衣　「あっ！　すっごいの来るっ！　私、もうイクっ！　イクイクイク――――……」

真衣　「イクうううううううううううううううううううううううううううううううう～～～～～～～～～～～っ！！」

真衣　「あくっ、あっ、あああっ！　おまこに、中出しされながら、私、ずっとイッてるっ、イッちゃってますううっ！　先輩の射精おちんぽ、凄いいいいっ！！」

真衣　「ああああぁぁぁぁぁっ……！　かはっ！　ああっ！すっごい出てますっ！　精子、いっぱい……！　何回も出したのにっ、まだこんなに出るなんて、凄いいいっ！」

真衣　「おまんこ締めすぎ！？　すみません、先輩！　勝手におちんぽ、締めちゃうんですうっ！　うくっ、あっ、あああっ！　あああああぁぁぁぁ……」

真衣　「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……！　はぁ……！　はあああぁぁぁぁ～～～……！」

真衣　「……最後……しゅごかった……です……気絶しちゃうかと……思いましたぁ……ああぁぁ……」

真衣　「……私のおまんこは……先輩のおちんぽが……大好きになっちゃいましたぁ……はぁー……」

真衣　「……もちろん……先輩のことも大好き、ですよぉ……ふふふっ……」

真衣　「……汗、かいちゃいましたから、もう一回、お風呂に入りましょうか……。また私が身体を洗ってあげますね」

◆Track.6

真衣「……それじゃあ、先輩。一緒に寝ましょうね。寝つくまでギュッってしててあげます」

真衣「ぎゅう〜。私のおっぱいに顔を埋める先輩……かわいい……ヨシヨシ……ヨシヨシ……ナデナデ……ナデナデ……」

真衣「……こうしてイチャイチャしていると恋人みたいですね。私としてはー……別に恋人になっちゃってもいいんですけどぉー……？」

真衣「ふふっ。わかってますよ。先輩は今、仕事のことで頭がいっぱいで、そーゆーことまで考えられないんですよね？」

真衣「申し訳ない？　やだ。謝らないでください。仕事に打ち込む先輩が私は大好きですから……。こうやって私で甘えてくれれば、それで充分ですよ」

真衣「（独り言を呟くように）……こうやって既成事実？を積み重ねて行けば……先輩が恋人欲しいってなった時、まっさきに私を選んでくれるはず……」

真衣「ん、何ですか？　して欲しいことがある？　ぜひ言ってください。何でもしてあげますよ？　もう一回、おっぱい吸いたい？」

真衣
「ふふふっ。おっきな赤ちゃんですねー。パジャマのボタンを外すので、ちょっと待って下さいね……。んっ……はい、おっぱい、出てきましたよ」

真衣
「あんっ。そんなに強く吸っちゃ、また感じちゃいますよぉ……ゆっくり優しく……んっ……はぁ……んんっ……こっちのおっぱいも吸いますか？」

真衣
「はい、どうぞ……あっ……んんっ……吸い方、エッチですぅ……ペロペロ舐めながら吸うんですから……んんっ……はぁ……あぁぁ……」

真衣
「このままおっぱい吸いながら寝たい？　どうぞ……ヨシヨシしててあげますから……このまま眠ってください、先輩……」

真衣
「ヨシヨシ……ヨシヨシ……ナデナデ……ナデナデ……がんばり屋さんの先輩……今はゆっくり休んでくださいね……」

真衣
「ヨシヨシ……ヨシヨシ……ナデナデ……ナデナデ……あ……先輩が寝ちゃいました……ふふふっ……本当にかわいい……」

真衣
「じゃあ、私も寝ますね……大好きな先輩……おやすみなさい……ちゅっ」